

【資 料】

外来における臨地実習に関する国内文献レビュー

志賀加奈子* 前田陽子*

【要 旨】

本研究は、国内文献をレビューすることで、外来における臨地実習の内容と方法を整理し、課題を明らかにすることを目的として行った。医中誌 Web と国立情報学研究所論文情報ナビゲータを用いて、2003年から2012年の研究論文を検索し、23件を調査対象として選定した。マトリックス方式を用いて分析した結果、外来における臨地実習は、ほとんどの看護学領域において行われており、実習の成果も得られていた。しかし、学習内容には、看護問題などは含まれておらず、学習が難しい内容や学生の困難感もあることがわかった。また、「付き添う」「対話する」などの見学や受け持ちとは異なる実習方法が用いられていることはわかったが、どのようなものなのか記載がなく把握することができなかった。外来における臨地実習は、一人の受け持ち患者の看護過程を通して学ぶ従来型の臨地実習の方法を用いることは難しく、外来における臨地実習のあり方を検討していく必要があると考えられた。

【キーワード】 臨地実習、外来

I. はじめに

看護基礎教育における臨地実習は、病棟において一人の入院患者を受け持つ方法をモデルとして考えられてきた。しかし、平成23年に示された『看護教育の内容と方法に関する検討会報告書』において、「在院日数の短縮化により学生が実習期間を通して一人の患者を受け持つことが難しくなっている。」¹⁾と指摘されており、伝統的な臨地実習モデルの維持は難しくなっている現状にある。一方、在院日数の短縮化は通院患者の増加を伴っている²⁾ことから、外来における看護ニーズは大きくなっている。したがって、今後の看護基礎教育における臨地実習は、看護学生が外来において学習する機会や必要性も増してくると考えられる。

これまでに行われた臨地実習に関する研究^{3) 4) 5)}は、病棟実習を前提としているため、外来における臨地実習の効果的な内容や方法については整理されていない。そこで、本研究は、国内の文献をレビューし、外来における臨地実習の内容と方法を整理す

ることで、臨地実習の課題を明らかにすることを目的として行った。

II. 研究方法

1. 調査対象の選定

文献は医中誌 Web と国立情報学研究所論文情報ナビゲータ（以下 CiNii とする）を用いて、キーワードを「外来」「実習」、検索対象期間を最新10年間である2003年から2012年として看護の研究論文を検索した。得られた146件のうち重複を整理し、総説と発表抄録および外来における臨地実習を含まない文献は除外した。その結果、調査対象として23件を選定した。

2. 分析の方法

本研究はマトリックス方式に基づいて分析を行った。マトリックス方式とは、「体系的に文献をレビューするための、構造であり過程でもある。」と定義されており、大量の文献をレビューするための実

* 日本赤十字北海道看護大学

(2014. 3. 27受理)

践的な方法である⁶⁾といわれている。対象文献を外来における臨地実習の内容と方法という2つの観点から、実習領域、実習の目的・目標、実習の成果・課題、実習施設の種類の種類、実習日数、指導方法などについてマトリックス表を作成して分析した。

3. 用語の定義

本研究において、「外来」とは医療施設において入院を伴わずに行われる看護実践の場であると定義した。

Ⅲ. 結 果

1. 対象文献の概要

調査対象とした23件の文献(表1)は、医中誌Webによって得られたもの11件(48%)、CiNiiによって得られたもの7件(30%)、重複して得られたもの5件(22%)であった。第一著者の所属は、大学16件(70%)、短期大学5件(22%)、専門学校3件(9%)であり、看護教員が複数で取り組んだ文献が多く、臨床を所属とする著者の文献はなかった。研究の対象者は、学生21件(91%)、看護師1件(4%)、教員1件(4%)であり、ほとんどの文献が学生を対象としていた。データ収集方法は、質問紙調査2件(9%)、グループ面接1件(4%)、実習記録などの記録物13件(57%)、質問紙と記録物の併用7件(30%)であり、学生の記録物をデータとしている文献が多かった。実習科目は、小児看護学7件(30%)、成人看護学4件(17%)、母性看護学3件(13%)、在宅看護論2件(9%)、成熟期看護学2件(9%)、基礎看護学・老年看護学各1件であった。また、領域実習終了後の統合実習や継続看護実習では3件(13%)あり、外来における臨地実習は様々な領域において行われていた。

2. 外来における臨地実習の内容

1) 臨地実習の目的・目標(表2)

病棟と区別し外来実習における目的・目標を設定していた対象文献は14件(61%)あった。残りの9件(29%)は、病棟と外来の区別なく目的・目標を設定したり、目的・目標の記載そのものがなかった。記載していた目的・目標の内容は、主に外来における看護の役割を理解する、外来を受診する患者と家族に必要な看護の実際を学ぶなど、外来において実習を行うことが、必要不可欠である内容を設定して

いた。また、情報収集とアセスメントを目的・目標に含めていた文献はあったが、看護問題、看護目標、看護計画を含めていた文献はなかった。

2) 外来実習における学習の成果と課題(表3)

対象文献すべてが実習の成果を記載していた。その内容は、主に対象理解、援助方法や看護師あるいは外来の役割に関する学びが多かった。一方、実習の課題について記載した文献は15件(65%)あった。その内容は、学生は外来における臨地実習において、保健・医療・福祉の連携、トリアージ、育児支援、患者や家族の意志の尊重などは学習が難しかったこと、実習の場所や関わった患者による学生の学習内容に差があること、学生は「多くの人と話す」などコミュニケーションに困難感を抱えていること、見学やシャドウイングの場合は、指導者などから看護活動について意味の説明がなければ学習効率がかかること等であった。

3. 外来における臨地実習の方法

臨地実習を行った施設の種類の種類は、病院とした文献が11件(48%)と最も多く、診療所1件(4%)、その他は不明であった。臨地実習の場所は、内科系外来、外科系外来、産科外来、小児科外来、リハビリテーション外来、ストーマ外来、物忘れ外来、放射線科、検査部門、透析室、内視鏡室、救急外来、外来化学療法センター等と多様な場所で行われていた。実習日数は1日とした文献が6件(26%)と最も多く、最短2時間から最長10日間が割り当てられており、その差は大きく、記載がない文献も2件(9%)あった。外来一カ所あたりの学生配置数は2名前後とした文献が6件(26%)と最も多く、4-5名が1件(4%)、不明は16件(70%)であった。

外来における学生と患者との関わり方は、受け持ちや見学の他に、「付き添う」「同伴する」「介助する」「対話する」など、様々な表現が用いられていた。これらの方法は、受付から玄関を出るまで患者と行動を共にすることおよび患者に話を聞くこと、と説明されており、学生が何をどこまで行ったのか患者との関わり方の具体的な内容を把握することは難しかった。臨床指導者の有無とその関わりについて記載していた文献は12件(52%)であり、その内容は、患者を選定し同意を得て学生を紹介する、学生に患者情報を提供する、学生に看護体制を説明する、学生と行動を共にする、カンファレンスに参加する、実習記録の提出を受ける、などであった。教員の関

わりについて記載していた文献は、臨床指導者よりもさらに少なく7件(30%)であり、その内容は、オリエンテーションをする、学生と外来に入り指導する、患者に学生の見学を依頼する、カンファレンスに参加する、実習記録の提出を受ける、などであり、外来における臨地実習の具体的な指導方法について記載した文献はほとんどなかった。

IV. 考 察

1. 外来における臨地実習の現状

本研究の結果、外来における臨地実習は、精神看護学を除く多くの看護学領域において行われており、実習の目的・目標を病棟と区別するか否かにかかわらず、対象文献すべてが実習の成果を報告していた。したがって、学生にとって外来は病棟と同様に学習の成果が得られる場として有用であると考えられる。

一方で、学生は多くの人と話すことに困難を感じ、指導者などから意味の説明がなければ看護活動の学習が難しくなることが課題として示されていた。学生は、外来という不慣れな環境の中で、多くの患者やその家族と短時間の関わりを持つ必要が生じる。このような病棟実習との違いに数日あるいは数時間の間に適応して学んでいかななくてはならないため、困難さを感じていると考えられる。したがって、外来は学生が効果的に学習を進めるために教員や臨床指導者のサポートが特に重要な実習場であると考えられる。しかし、対象文献に記載された指導方法は、学生と行動を共にする、学生と外来に入り指導するという記載にとどまっていたため、具体的な指導の方法を明らかにすることはできなかった。今後は学生の効果的な学習をサポートしていくための具体的な指導方法を明らかにする必要がある。

また、本研究の結果、最も多く外来における臨地実習について報告していた領域は小児看護学であった。先行研究において、小児看護学実習は従来の実習場所である病棟の実習時間数が減少していることが報告されている⁷⁾。これらの背景として、小児看護学領域は、入院期間の短縮化に加えて、少子化による入院患児の減少や小児病棟の閉鎖も伴っており、病棟を中心とした伝統的な臨地実習モデルを維持することが特に難しくなっているため、外来に臨地実習の場を求めることが多くなっていることが考えられる。したがって、小児看護学領域は、伝統的な実習モデルに偏らない効果的な実習方法を検討するこ

とが急務であると考えられる。

2. 外来における臨地実習の課題

本研究の結果、実習の目的・目標に看護問題や看護計画を含めている文献はなかったことから、外来における臨地実習は、看護過程の展開を行わない実習方法が用いられていると考えられる。さらに、受け持つ以外に「付き添う」「対話する」などの多様な表現が用いられていた。これらのことから、外来において病棟実習と同様に受け持ち患者の看護過程を展開する方法で臨地実習を行うには難しさがあることがうかがえた。また、見学やシャドウイングは、指導者などから解説がなければ、効果的な学習は難しいことも示されていた。そのため、受け持つとは異なり、見学やシャドウイングとも異なる「付き添う」「対話する」などの実習方法が用いられていると考えられる。しかし、対象文献には、それらの方法について詳述されているものは少なく、把握することはできなかった。今後は、病棟実習とは異なる外来における臨地実習の方法について検討することが課題であると考えられる。

これらの他にも外来における臨地実習の課題は、多くがまだ明らかにされていない可能性があると考えられる。なぜならば、安齊らは、看護学実習に関する333件の研究をレビューした結果、学生に関する研究が多く、看護教員に関する研究は少ないものの、指導者の認識や教授スキル等に関する研究も32%程度は行われていることを報告している⁸⁾。山下らも看護学実習に関する研究をレビューした結果、半数以上の53.5%が学生を対象とした研究であったことを報告すると共に、学生は看護学教育の専門的知識を持っていないこと、学生による評価は学生が知覚した範囲に限られることなどから、実習指導の改善点を網羅するものではないことも指摘している⁹⁾。一方、本研究は外来における臨地実習に限定してレビューしたところ、91%の文献は学生を対象としており、先行研究よりもさらに研究の対象が学生に集中しており、臨床指導者や教員に関する研究は少ないことがわかった。臨地実習には、学生だけでなく教員や臨床指導者なども関わっていることを考えると、研究の対象が学生に集中していることは、指導者側の認識や教授スキルなど、見落とされている課題が多い可能性が考えられる。今後は、教員や臨床指導者を対象として、外来における臨地実習の成果を生み出すプロセスを明らかにしていく必要が

表1 対象文献

文献番号	著者	論文タイトル	掲載誌
1	小田和美、田中克子、北村直子、梅津美香、兼松恵子、奥村美奈子、古川直美、原敦子、早崎幸子、小野幸子、坂田直美、齋藤和子	成熟期看護学実習の外来実習において学生がとらえた「看護」—目標達成像からみた実習方法の課題と方向性—	岐阜県立看護大学紀要、3 (1)、95-101、2003
2	田中克子、梅津美香、小田和美、北村直子、兼松恵子、奥村美奈子、古川直美、原敦子、林幸子、小野幸子、坂田直美、齋藤和子	成熟期看護学実習の外来実習と透析室実習で捉えた「看護」の比較	岐阜県立看護大学紀要、4 (1)、133-139、2004
3	小川久貴子	疑似妊婦体験学習と産科外来実習で得た学生の妊婦理解の研究	看護展望、29 (7)、834-838、2004
4	梶原恭子、富安俊子、井手信	母性看護外来実習における看護学生の学びの検討	母性衛生、46 (2)、249-256、2005
5	中田芳子	外来看護実習での学生の学び	東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集、15、22-32、2005
6	四宮美佐恵、赤松恵美	母性看護実習(外来)での学生の気づき・学びの検討	看護・保健科学研究誌、6 (2)、61-68、2006
7	武居明美、佐名木宏美、辻村弘美、堀越政孝、反町真由、岡美智代、森淑江、二渡玉江、神田清子	外来継続看護実習におけるがん化学療法が患者に及ぼす影響に関する学生の学び	群馬保健学紀要、28、19-30、2007
8	堀越政孝、辻村弘美、武居明美、佐名木宏美、松井佐知子、鈴木伸代、岡美智代、神田清子、森淑江、二渡玉江	成人看護学実習におけるストーマケア外来での学生の学び	群馬保健学紀要、28、41-49、2007
9	長谷川桂子、石井康子	小児科外来実習からの学生の学び	岐阜県立看護大学紀要、8 (1)、11-18、2007
10	大見サキエ、片川智子、宮城島恭子、金城やす子	小児看護学領域における外来看護についての大学教育の現状	看護研究、40 (4)、383-390、2007
11	宮崎貴子、丹羽淳子、大西潤子、巻淵まゆみ、村木泰子	看護基礎教育における外来がん化学療法見学実習のあり方の検討—成人看護学臨地実習における外来見学実習の取り組み—	日本赤十字武蔵野短期大学紀要、20、25-35、2007
12	小島洋子、山縣香織	小児看護学領域における実習での継続看護の学び(第1報)—外来での継続看護実習導入の効果—	日本看護学会論文集、第39回看護教育、373-375、2008
13	山縣香織、小島洋子	小児看護学領域における実習での継続看護の学びと課題(第2報)	日本看護学会論文集、第39回看護教育、69-71、2008
14	山口佳代子、川島雅子、佐藤絹子、真田英子	看護技術経験にみる小児外来実習の実施意義について	日本看護学会論文集、第39回小児看護、212-214、2008
15	平元泉、平むつ子、三戸真由美	小児看護学実習における小児科クリニック見学実習の評価	日本看護学会論文集、第39回小児看護、215-217、2008
16	秋山千恵子、久保かほる、鈴木妙、柴崎いづみ、浅見多紀子、鈴木夕岐子、金子吉美	看護学生の外来・検査・治療部門の見学実習での学び	埼玉医科大学短期大学紀要、19、23-31、2008
17	島田真由美、増田信代	小児外来実習で「留意すべき子どもの権利について」の学生の学び	日本看護学会論文集、第40回小児看護、177-179、2009
18	宮谷恵、小出扶美子、山本智子、市江和子、高真喜、新村君枝	看護基礎教育の小児看護学実習における外来単独での病院実習の有用性の検討	日本小児看護学会誌、19 (2)、25-31、2010
19	山縣恵美、小松光代、田中恵子、中川正法、岡山寧子	老年看護学実習における神経内科(物忘れ)外来での実習効果～学生記録からみた認知症ケア・外来看護の学び～	京都府立医科大学看護学科紀要、20、27-36、2010
20	中田芳子、磯みどり、新村直子	在宅看護論実習における外来看護実習指導の現状—実習指導者の実習の受け止め方と課題—	日本看護学会論文集、第41回地域看護、111-114、2010
21	砂見緩子、北村奈津子、本多和子、梶原倫代、高田由美、村松真千子、佐藤みつ子、松田明子	基礎看護学実習における外来実習の学習成果と課題	帝京大学医療技術学部看護学科紀要、1、81-90、2010
22	佐藤可奈、深堀浩樹、佐々木吉子、柏倉淑子、小牟田智子、井上智子	看護の統合と実践実習のあり方の検討—東京医科歯科大学の学生による実習評価から—	看護教育、52 (3)、208-213、2011
23	上山和子	小児看護学における外来実習の学習成果の分析—小児の観察状況と外来看護の役割に焦点を当てて—	インターナショナルNursingCareResearch、10 (4)、117-125、2011

表2 対象文献における実習の目的・目標

文献番号	外来実習の目的・目標
4	目的：外来における妊産婦の看護を理解する。 目標：①妊婦健康診査の目的を理解し、妊娠週数に応じた母体と胎児の変化の理解を深める。②産婦人科外来の特徴を理解する。③幅広い年齢層、種々の女性生殖器にかかわる疾患を持つ患者が来院することを理解する。
5	目的：外来を利用する人々の特徴を理解し、入院から外来、外来から地域への継続看護を理解することができる。 目標：①外来の機能の特徴を述べることができる。②外来における対象者の特徴を述べるができる。③継続看護について理解する。④外来看護の役割を考えることができる。
6	目標：妊婦の持つ身体的・心理的・社会的特徴を理解した上で、個々の妊婦に適応した看護のあり方を学ぶこと。 行動目標①妊娠の生理を理解した上で、妊娠によっておこる母体の生理的変化並びに胎児発育の観察ができる。②妊娠経過に伴う妊婦の心理的変化や母性愛の発達経過を知る。③妊婦健康診査の実際を知り、医師や助産師による健康診査の介助ができる。④妊婦やその家族に対する生活指導の実際を知る。⑤新しい家族を迎えるための準備指導の実際を知る。⑥妊娠中の母子におこるトラブルを予防・早期発見し、妊娠中を快適に過ごし安産するための保健指導の実際を知る。⑦母乳育児のための指導方法を学び、それが正しくできる。⑧母子に発生する妊娠中の異常に対する医療の介助と看護の実際を知る。⑨妊婦およびその家族に対する個別指導並びに集団指導の実際を知る。
7	目標：外来化学療法が患者・家族の生活に及ぼす影響を把握し、看護を検討することができる。
8	目的：ストーマケア外来に通院する患者の継続看護の実際が把握できる。 目標：ストーマケア外来の見学を通して、手術療法を受けた成人期にある対象が退院後にどのような問題を抱えて生活しているのか、またセルフケア獲得過程でどのような困難を抱えているのかについて学習する。
9	目標：外来での小児看護の実際を理解する。学習内容：①小児が受診に至った過程を知る。②受診時の親子の関わりを観察し、小児の疾患と家族の心配や気持ちを理解する。③医師や看護師が小児と家族に対応する様子からそのかかわり方を学ぶ。④外来での受診の流れを知り、看護師の役割を考える。⑤外来看護の役割を考える。
10	学習内容：外来の組織と機能、小児外来看護の特徴、外来を訪れる患児と家族の心理、外来受診する子どもの症状や健康問題、在宅での生活指導の意義と実際、診療・治療・検査の準備・介助、外来と他部門の連携、地域保健・教育・福祉機関との連携
11	目的：①外来がん化学療法という高度ながん専門外来の意義と、そこで働く看護師の役割を理解する。②外来がん化学療法における医師・看護師・薬剤師・他関連部門との連携の必要性について、外来におけるがん化学療法看護の視点から考察する。 目標：①外来がん化学療法における看護師の役割を理解することができる。②患者が外来において安全にがん化学療法をうけるためにどのような対策がとられているか理解することができる。③チーム医療を実践するために看護師は医師や他関連部門とどのように連携し協力し合っているのか理解することができる。④外来で行われているがん化学療法の実際と特徴を知ることができる。
12	目的：社会生活や家庭生活を維持しながらケアや治療を受けている人に、継続的に看護を実践するために必要な知識・技術・態度を養うこと。 目標：①対象（家族を含む）を理解する。②対象を取り巻く社会支援システム（在宅支援関係）について把握する。③対象の健康レベルに合わせた看護の継続性を理解する。④看護の実際を学ぶ。⑤患者・家族を尊重した態度がとれる。
15	目標：①小児科クリニックが様々な年齢や健康レベル、疾患、症状の児と家族を対象としていることを理解する。②小児科クリニックにおける診察の介助、検査・治療・処置の介助の実際を学ぶ。③小児及び家族への説明・指導場面を通して対応のあり方を理解する。④家庭や地域における小児科クリニックの役割を理解する。
16	目標：外来患者の看護を通し、継続看護の実際を学ぶ。 透析室実習目標：人工透析を受けている患者の看護を学ぶ。 内科外来実習目標：外来患者の看護を通し、継続看護の実際を学ぶ。 C I C U実習目標：集中治療室での看護を学ぶ。 内視鏡室実習目標：内視鏡検査を受ける患者の看護を学ぶ。 放射線科実習目標：放射線医学における看護の役割を学ぶ。
18	目的：外来を受診する小児と家族に接し、受診行動を共にし、必要な援助を学ぶ。 目標：①小児の成長発達の特徴が理解できる。②小児の現在の健康障害および健康のレベルが理解できる。③健康障害と発達障害や入院が小児及び家族に及ぼす影響を理解できる。④小児に適した看護援助を実践し考察することができる。⑤一人の小児について、情報収集・アセスメントができる。
19	目的：神経内科外来受診患者および家族に付き添い、認知症等の診断過程や病態、治療の実際を理解し、原則に沿った看護援助を学ぶことができる。 目標：①認知症をはじめとする神経内科疾患の検査・診断・治療の実際を理解できる。②医師の診察、看護師の診療介助や指導の実際と検査・診断過程における患者及び家族とのコミュニケーションから愁訴、生活の背景、受診までの経過を理解できる。③外来における看護援助場面から患者及び家族のおかれた現在の生活状況と必要な看護介入の視点を考えることができる。④病棟や関連病院および関係機関との連携の実際について理解することができる。
20	目的：外来を利用する人々の特徴を理解し、入院から外来、外来から地域への継続看護を理解することができる。 目標：①外来の機能の特徴を述べることができる。②外来における対象者の特徴を述べることができる。③継続看護について理解する。④外来看護の役割を考えることができる。
21	目的：①病院および外来の役割と機能について知る。②外来患者にどのような看護が行われているかを知る。 目標：①A病院の概要と特徴、役割と機能について学ぶ。②看護部の役割と機能、看護部の目標と看護の概要について学ぶ。③院内各部署の組織や役割と機能及び看護との関わりについて学ぶ。④外来における看護の役割と機能について学ぶ。⑤患者を取り巻く他の専門職者との連携・協働のあり方について考える。

あると考える。

V. おわりに

本研究の結果、外来における臨地実習は、多くの看護学領域において行われており、実習の成果が得られている現状にあった。一方、外来における臨地実習の効果的な方法は明らかではなく、研究対象が学生に集中していることから、明らかにされていない課題がある可能性も考えられた。

しかし、本研究は、全ての文献を把握できていない可能性があり、さらには文献に記載された内容に基づくものであるため、実数を把握できないという限界がある。今後は、明らかになった課題をふまえて、外来における臨地実習のあり方を検討していく必要がある。

VI. 引用文献

- 1) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書、2011
- 2) 厚生労働省：平成23年患者調査の概況、2011
- 3) 安齊由貴子、山田あゆみ、大賀明子：看護学実習に関する研究動向と今後の課題1、看護教育、35 (13)、1122-1127、1994
- 4) 山下暢子、定廣和香子、舟島なをみ：1994年から1998年における看護学実習に関する研究内容の分析—学生を対象とした研究に焦点をあてて—、看護教育学研究、12 (1)、29-36、2003
- 5) 岩井眞弓、内山久美、大井美樹、大坪昌喜、船越和美、大澤早苗：看護学実習における指導プロセスの関連要素—1996年から2009年の国内先行文献の分析—、保健科学研究誌、9、15-28、2012
- 6) Judith Garrard/ 安部陽子訳：看護研究のための文献レビュー マトリックス方式、医学書院、2012
- 7) 宮谷恵、大見サキエ、宮城島恭子：教員から見た学士課程における小児看護学実習の現状、日本小児看護学会誌、22 (2)、68-74、2013
- 8) 安齊由貴子、小林小百合、中谷啓子：看護学実習に関する研究動向と今後の課題2、看護教育、36 (1)、75-79、1995
- 9) 前掲4)

表3 対象文献における実習の成果と課題

文献番号	外来実習の成果	外来実習の課題
1	具体的目標 (1) その人と家族の意向・意思を尊重した援助 (2) その人とその家族の自立性・自律性を尊重した援助 (3) 看護ケアの安全性と安楽性を確保した援助はほぼ達成できた。	具体的目標 (1) その人と家族の意向・意思を尊重した援助 (4) 保健・医療・福祉との有機的な連携は学ぶ機会が少なかった。
2	透析室では、具体的目標 (1) その人と家族の意向・意思を尊重した援助 (2) その人とその家族の自立性・自律性を尊重した援助 (3) 看護ケアの安全性と安楽性を確保した援助 (4) 保健・医療・福祉との有機的な連携を学ぶ機会が得られる。	具体的目標 (1) その人と家族の意向・意思を尊重した援助は学ぶ機会が少なかった。
3	妊婦疑似体験学習では、外面的・身体的変化を中心にした「非文脈的な妊婦理解」をしたに過ぎなかった。それを元にして産科外来実習では、妊婦の悩み・不安は個々の背景や状況・対処能力などから形成されるという「文脈的な妊婦理解」をする。	記載なし
4	患者の立場に立つことの重要性を学んだ。自分の知識不足や技術の未熟さを感じる反面、学内での学習とつなげて理解を深めた。身だしなみやマナー、短時間でアセスメントを行い看護を提供することの重要性と難しさを学んだ。命の重さに感動し、自分の母親に対して感謝の念を抱いた。	記載なし
5	①学生は外来患者が家庭で生活しながら治療を受けている人と捉えている。困難を抱えながら強く生きている存在であると理解している。②学生は外来看護師が患者との信頼関係を基盤に短時間に状況をアセスメントして適切な指導を行っていることを理解している。③学生は多様な視点から継続看護について理解を深めている。	配置された診療科によって学生の学習内容に違いがあるため、学生カンファレンスを活用しながら学生個々の体験が共有できるよう工夫する必要がある。
6	プライバシーの保護や細かい配慮の必要性、夫の協力の必要性、仲間づくりの場となること、呼吸法の実際、助産師の指導の工夫を学んだ。胎動・つわりを学びNSTで胎児の健康状態を把握できた。妊婦の不安を学生は感じ取り援助として傾聴を挙げた。つわり時の食事内容や調理方法の工夫、貧血予防および改善方法、バランスのとれた食事内容、糖尿病妊娠合併時の食事指導を学んだ。沐浴指導、立ち会い分娩、里帰り分娩の利点欠点を学んだ。ケースによって指導内容が違っていることに気付いた。乳房管理の必要性を再認識できた。帝王切開、さかご体操、RH不適合妊娠等の看護を学んだ。	外来で関わった妊婦の状況によって体験できる項目に限られる。

文献番号	外来実習の成果	外来実習の課題
7	化学療法が生活に及ぼす影響と患者自身が行っている対応について学んでいた。	生活を再調整する必要性の理解については記録単位数が少なく、がんが慢性疾患という認識が薄い可能性がある。
8	ストーマケア外来の役割と提供されるケア、ストーマケアを行う看護師に求められる能力、継続看護の重要性、患者のストーマに対する思いや対応、ストーマの状態や問題、ソーシャルサポートの必要性を学んだ。	ストーマ以外の手術を受けた患者に対する外来看護を学ぶことができる実習項目の設定、術前看護を学ぶための外来実習体制を整備することである。
9	子ども理解、家族の理解、看護活動の理解、外来の理解、医療者の理解（看護師を除く）、その他を学んだ。	トリアージや子どもが健康に育つための支援などについては、学生が行われている実際に気付かず記述がなかった。
10	小児外来看護の特徴、外来を訪れる患児の心理、外来を訪れる家族の心理、外来受診する子どもの症状や健康問題、在宅での生活指導の意義と実際、診療・治療・検査の準備・介助、外来と他部門の連携、地域保健・教育・福祉機関との連携を学んだ。	記載なし
11	外来がん化学療法における看護師の役割、安全ながん化学療法の提供とその対策、院内における他職種との連携、外来がん化学療法の実際とその特徴を学んだ。	記載なし
12	現在の身体・治療状況、活用している社会資源内容、教育状況の理解、外来が親の情報交換や互助会的存在であること、器械は自宅用だけでなく通園用にも必要であること、等を学んだ。	学生の準備性と実習受け入れ体制と外来看護の質の高さが鍵となる。
13	外来の機能、継続看護の理念、子どもの在宅ケアの意義・必要性、継続看護の目的、看護の役割、社会資源の種類、看護師に必要な技術、看護師に必要な資質、を学んだ。	記載なし
14	外来実習の経験があるグループは経験がないグループよりも経験できた技術内容が多い。外来実習によって経験する機会が多くなる技術は、胸囲測定、頭囲測定、身長測定、採血の介助、診察の介助、点滴静脈注射施行時の介助、採尿パックでの採尿、であった。	記載なし
15	経験項目を病棟と比較すると、乳幼児との接し方 ($p<0.05$)、乳幼児の診察の介助、検体の採取・皮下注射・薬液吸入 ($p<0.01$) は小児科クリニック実習が高かった。乳幼児のバイタルサイン測定・経口与薬、採尿、輸液、口腔・鼻腔吸引は病棟実習より低かった。	小児の発達段階に応じた説明や対応、検査・治療・処置時の介助の理解については、実習目標の到達状況が低かった。
16	いずれの場所でも患者の心理的特徴と不安に対する援助を学んだ。透析室実習では、患者にあった日常生活指導・透析中の環境調整・安全対策の必要性について学んだ。内科外来実習では、迅速に判断・対処しながらわかりやすい患者指導を行う必要性を学んだ。内視鏡室実習では、身体的苦痛に対する援助の必要性や安全対策など内視鏡を実施するための看護の留意点について学んだ。放射線科実習では、放射線の原理や副作用を理解して安全対策を行うことや状況に応じて判断・対処することの必要性を学んだ。	記載なし
17	留意すべき子どもの権利について、最小限の侵襲、意志の伝達、抑制と拘束、保護者の責任、説明と同意、家族からの分離の禁止、教育・遊びの機会の保証の7つを学んだ。	プライバシーの保護、平等な医療を受ける、の学びは表出されなかった。基本的な看護者としての姿勢の教材化・意識化が課題
18	学生が良かったと思っていることは、多くの疾患を学べる、コミュニケーションを学べる、外来看護の役割を学べる、成長発達の理解ができる、多くの家族関係を学べる、であった。学生の学びは、短時間での看護の必要性、在宅療養・継続治療、計測・診察の大変さ、家族への配慮、子どもへの配慮、家族へのインフォームドコンセント・指導、確実な技術の必要性、相談の場としての役割、幅広い成長発達段階、であった。	学生が困ったことは、多くの人と話すこと、勉強が大変なこと、であった。
19	診察の場面（医師の説明や助言・検査診断治療など）、介護負担の内容と大きさ（家族の精神的・身体的・経済的負担など）、家族との関わり（対応の仕方の理解、介護者のコーピングなど）、患者との関わり（病識、孤立感、自尊心の低下、楽しみなど）、若年性認知症（特有の悩み、告知など）について学んだ。	担当した患者および家族に対し、必要な看護介入の視点を考えられるような学習方法の検討が必要である。
20	外来の指導者が学生に学んで欲しいことは、患者の生活を重視した継続看護や連携であった。	実習期間が短いので学生に合わせた指導が難しい、見学が多いので学生に意味を説明する必要がある。
21	外来看護の役割と機能、看護専門職者に求められる知識・技術・態度、コミュニケーション技法、外来患者の心理を学んだ。	診療科によって見学内容も異なるため学生の学びに差がある。
22	看護部以外の部門（中央検査室・薬剤部・高気圧治療部・輸血部）を見学し、各部門での看護師との連携のあり方などを学んだ。専門外来・検査部門・救急外来にて看護師のシャドウイングを行い、看護活動の実際を学んだ。	学生はシャドウイングによるストレスがあり、多忙な状況になり臨床指導者が説明不可能で、説明不足による学習効率の低下をもたらしていた。
23	小児の健康維持増進に向けた看護、健康の回復に向けた看護、小児および家族を支える看護、小児および家族の不安を軽減させる看護、小児の状態をアセスメントする力、育児相談に対応できること、家庭療養の指導に向けた看護を学んだ。	記載なし